

中国伝統医学と道教（第30回 「医道」と「医家」）

吉本 昭治

吉本医院

『素問』『靈樞』の医書古典と、『老子』『列子』『莊子』『呂氏春秋』『淮南子』（後二者は雑家にも入る）などの道家系統の書の内容を較べると、同じ文字、文言、趣意が共通してみられることにおどろく。その一例として「恬淡」という道家のいう「無為自然」を表わす言葉は、恬淡爲上（老子第31章）、虚静恬淡（莊子天道）、恬淡無爲（莊子胠篋）、恬愉（莊子在宥、盜跖）、恬淡虚無（素問上古天真論）、恬愉爲務（同）、恬憺之能（素問陰陽応象大論）、恬憺無爲（靈樞上膈）などがある。また『老子第12章』の「五色目、五音耳、五味口」の目耳口は医、道家、道教（三関という）の共通項の一つであり、「九寂は天に通ず」「清陽は天、濁陰は地」「心は君主の官」「天覆地載」「天円地才」「人頭円足方」も同様に見られる。

『素問著至教論』に「医道論篇」とあるが、これがどのような書であるか分らないが、医道とは「医の道德、倫理」とも解釈されるが、道とは道家のいう道ともいえる。

秦末漢初に「黄老道」という道家の流れがあった。文帝母の竇太后などが厚く崇敬したといわれ、儒教が国政の中心になる前、大きな力があった。この黄とは黄帝、老は老子をいう。黄帝は『素問』『靈樞』から医の祖とおもわれがちだが、キング・オブ・キングスだから統治者としての顔と、老子の思想の中に治国治想がある。黄老道とは君主としてのあり方、国を治める方法、すなわち「法」に重きをおいたものといえる。

黄老道が黄帝と老子なら、ここで医道とは黄帝と道家＝老子と考えられることになる。

『靈樞陰陽繫日月、玉版』に竹帛に記して子孫や後世に伝えよとある。竹帛とは竹筒と帛書のことで、ここで思うのは例の「馬王堆出土」の木簡・帛書で、ここに「五十二疋才」の医書が出てきた事はよく知られているが同時に『老子』本がでてきた。これは書体により甲・乙本に分れるが（この乙本前部に『黄帝四経』といわれる部分があり、これが黄老道であろうとされている）、医書と共に、『老子』が並んでいた事はヒントになる。

以上をふまえて、春秋・戦国時代（前550～221年）活躍した諸氏百家（儒家・道家・法家・陰陽家・墨家・雑家など）の中に「医家」という存在があったのではという提案である。

『史記 扁鵲倉公列伝』を見てみよう。これに扁鵲の事跡が記されている。前五世紀頃の人だが、彼は斉・趙・晋・魏などの各国宮廷を渡り歩いている。孔子が弟子達をつれて各国遊説をしたのに似ているが、魏の太子を診たとき彼は弟子の子陽に鍼をみがかさせている。弟子は一人ではなかったろうし、彼の背後にはある人数の弟子がいて、各国で自分の医道を広げようと努力したと思われる。ここに「医家」というグループ、あるいはファミリーといってよい一団があったのではないだろうか。孔子と弟子達のはなしや、墨家の集団自殺のように、その言うべき処、行うべきことについては互に強い結びつきがあったのではなからうか。扁鵲は孔子の例のように、志違せず、その後、邯鄲では婦人科、雒陽では老人科、咸陽では小児科に早変わりしている。これも彼の医（医術から医学への移行期前ともいえるか）の達人であることを示しているが、孔子が陳蔡の国の間で敵に囲まれ7日間も飲まず食わず（『莊子 雜篇讓王』）の有様をみるにつけ、当時の遊説は多くの困難を伴ったと考えられる。

いずれにしろ、以上の理由から諸氏百家の中であって、医道を広げていこう、認知されようといった、学派、学閥といってもよい「医家」というのが、諸氏百家の中であつたのではなからうかという考えである。